企業名：　　川崎汽船株式会社

レポート名：　“K” LINE REPORT 2022

1.　この会社が目指している将来の姿が理解できるか

川崎汽船は「低炭素・脱炭素化」など、サステイナブルな経営を第一に掲げていることが読み取れた。報告書にて、「当社グループは、国際海事機関（IMO）が 目標として掲げる 2030 年までの排出効率 40%削減を上回る、 50%削減を独自の目標としています。(「“K” LINE REPORT 2022」５ページ)」と述べており、同社の目標が具体的な数値として示されていることが良い点だといえる。また、その目標を掲げるだけでなく、その目標を達成するための具体的な施策としてＧＨＧ削減戦略グループの設立やサステナビリティ経営推進委員会の設立などを行ったとあり、実際に行動力があるというアピールもできている。

さらに、同社はグローバル化が進む中でも安定した経営を続けるために「パートナーシップの深化」も長期経営ビジョンの一つとして挙げていた。ここでは、同社がすべての利害関係者から信頼を得られるよう、同社の優位性とパートナーの優位性を掛け合わせた経営の重要性を述べ、協力的な姿勢を強く全面に出していた。

以上より、川崎汽船は環境へのダメージを最小限に抑えることにより持続可能な社会への貢献を目指し、かつステークホルダーとのパートナーシップを優先した経営を行うことが同社の目指す将来の姿だと理解することができた。

2.　この会社の現在の競争優位性が理解できるか

同社の統合報告書では、「低炭素・脱炭素化」が何度も何度も繰り返し述べられ、強調されていることが伝わってきた。これは同社が循環型経済の実現を目指す国際非営利団体 CDP から 6 年連続で A リストに認定されていることが関係しているとわかった。このＡリストに認定されているのは日本企業で同社を含めた４社だけらしく、環境への配慮という点がこの企業の競争優位性であると理解できた。

3.　その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

同社は現状の環境対策に満足することなく、今後代替燃料がどの程度普及していくか、再生可能エネルギーへ転換することにあたってどのような制約があるかなどをそれぞれの担当者が分析し、先見的に環境問題に対応する姿勢を見せている。こうした努力を怠らない限り、同社の環境配慮という競争優位性は持続するだろう。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

川崎汽船の人材育成の根底には、“K” LINE スピリットという自主独立・自由闊達・進取の気性を表すキーワードが存在する。グローバル化の加速する現代の中で本質的なプロフェッショナルを磨くことに専念している。この“K” LINE スピリットを体現する個をチームにまとめ上げることで、同社のトップ水準の安全と高い品質を実現することを目標としている。

同社には、自ら学びに行けばいくらでも深い知識を獲得することができる環境は整っていると思われる。報告書に実際企業で働いている従業員の声が掲載されていたが、そこには会社から提供される実務研修が充実しており、それによってより専門的な知識を学び、仕事の質が高めることが可能だと述べられていた。報告書にもあったが、従業員を放置するような経営ではなく、一人でも多く専門的な場面で活用できるような人材を育てようという人材戦略が明確に示されていた。一方で、従業員の声の中に上司の推薦による外部研修の内容が記載されていたが、より専門的な人材を増やしたいのなら上司の推薦以外でもそうした外部の研修に行けるようにしたらよいのではと感じた。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

まず、すべての場面でビジョンを明確にしているのが評価できる点だと思う。例えば、経営の場面では、短期的、中期的、長期的なビジョンをそれぞれ示しており、環境についても２０５０年までのビジョンを具体的に述べていた。これにより、報告書の一つ一つの言葉が一つの目標に向かっていることがわかるので、読む側としても内容が整然として見えて非常に理解が容易である。

次に評価できる点は色合いである。これはただのデザインと言ってしまえばおしまいかもしれないが、この報告書の色合いは印象がかなり良い。具体的には海をイメージさせるような淡い青を基調とした色が用いられており、長い文章を読んでいる中でも常に汽船会社であるということを意識することができる。これによって難しい技術的な専門用語が出てきても何の話をしているのか見失わずに済む。また、項目ごとに色分けをしているので、単調な印象にならず、さらに長々とした文章を読んだ後でも事柄ごとに記憶で整理がつきやすい。

さらに、報告書の中でそれぞれの分野の担当者の顔を出すことが非常に評価できる点だと感じた。顔があることで、読者が親近感を抱くことにもつながるし、何より批判を恐れない姿勢が素晴らしいと思った。こうした潔さが、透明感のあるコーポレートガバナンスにもつながっていくと思う。

改善すべき点としては、見出しなどによりどこが重要度の高い箇所なのかある程度推測

はできるものの、本文は常に同じ文字で書かれていたので、強調したいところの字体を変えたり、太字にしたりするなどの方法をとっても良いと思った。単調で難しい長文ではなくすことで、企業のことをよく知らない人でも容易に理解できると考えた。